

原子力談話会 発行

原子力談話会ニュース

1955・3・1

外務省に出来た原子力平和利用国際会議参加準備協議会	(2)
原子力平和利用国際会議についてのハマーショルドの手紙	(5)
アジア諸国会評へ富永五郎君を	(7)
伏見区らの帰口	(12)
支部だより — 京都 —	(10)
伏見さんの手紙	(13)
雑誌「原子力」について	(15)
ウイーン・アピール	(4)
etc	

No 9



原子力平和利用国際会議 参加準備検討会 は 外務省に出された

—— 学術会議も協力体制 ——

別項のとおり、口連事務総長からの会議招請状が2月9日外務省についた。2月10日、外務省に関係者が会合し話合の結果、こんどの会議参加については政府代表を出すのだから外務省の責任でおこなわれ、原子力に関することから準備調査会の意向も尊重する。内容については専門部会を設けて検討することになった。

2月14日、学術会議では、原子力問題委員会在京委員会が開かれて討議の結果、学術会議の中にも準備委員会を作ることがよいと考え、そのための世話人会を開くこととして、会長、原子力問題委員長(代理)、原子核特別委員長、放射線影響調査特別委員長、がそれぞれ適当な人々を伴って開くことになった。

2月17日(木)、学術会議の上記の準備世話人会が開かれた(茅会長、本田事務総長、小椋、浜田、権田、中泉、松山、朝永、石井、武田、服部、大塚、が出席)。その話合の結論は、

準備委員会を学術会議にもうける。この任務は、口際会議に、どういう資料・論文を出すべきかを検討し、適当な人に依頼するなどして、それを整理作成し、また会議に出席して討議に参加するのに適当な人物を推せんすることである。この準備委員会は、会長、原子力問題委員長、原子核特別委員長、放射線影響調査特別委員長(但し委員長は茅氏であるので中泉幹事が出る)、同委員会各班々長、そのほか、資源関係で安芸敏一、原子炉関係で伏見康治などで構成され、これらのメンバーは、必要にしてミ=マムな陣容であって、以後必要に応じ追加されるものとされた。

この委員会の誕生は、当然学術会議の運営審議会にかけられたのち正式にできあがるものであって、一応2月26日に才1回会合が予定された。

また、外務省に当然準備会が作られるだろうとのことで、その下に専門部会が作られると思われるので、その部会の構成にあたっては、この学術会議内に誕生を予定された委員会のメンバーを推せんしようということになった(茅会長を通じて)。

2月23日(水)午後、外務省では、口際会議参加準備検討会とその専門部会の合同の才1回打合会を開いた(場所は学術会議で)。

まず外務省口際協力局才1課課長の経過説明ののち、専門部会の仕事に

ついで茅氏から説明があり、次に提出すべき資料中、とくに広島長崎セキニのものはどう扱うかなどの話し合いがされた。専門部会の役割は、17日の学術会談の才の世話人会で述べたものと同じものになつてゐる。

この頃から、茅会長は学術会談内に準備委をもちという最初の考えをすて、学者側を併せ外務省の方へ送りこむ構想にかえたものと思われる。彼はこれを「外務省に花をもたせる」と表現してゐる。

2月24日(木) 学術会談では原子力尚題委が開かれ、14日の在京委や、17日の世話人会の報告ののちに、口際会談について討論がなされた。結論を要約すれば、こゝでの会談は公衆の口際会談であるので参加すべきである。しかし、この会談が生まれるまでには政治的にいろいろと問題のあつたことであり、その会談の提唱をより真に科学的な会談たらしめるよう学術会談は積極的に努力すべきであるといふのである。

けれども、予定された学術会談の準備委員会は、茅会長の工作で作られぬことになり、従つて外務省の方の専門部会において一切の準備がおこなわれることになつた。もちろん学術会談として原子力尚題委はこの尚題について扱つてゆくことは当然であるが。

3月3日には外務省に生まれた専門部会の会合が予定されている。

さて外務省に生まれた参加準備協議会のメンバーは

外務省口際世カ局長

大蔵省主計局長

文部省大学学術局長

厚生省公衆衛生局長

農林省農業改良局長

通産省工業技術院調整部長

経済審議庁計画部長

資源調査会副会長

科学技術行政協議会事務総長

学術会談会長

同 原子力尚題委員長

同 原子核特別委員長

同 放射線影響調査特別委員長

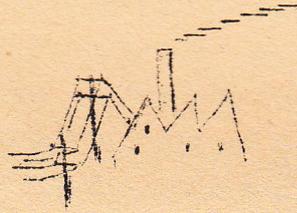
(3)

であり、学術会議事務局長も加わるはずである。

専門部会の委員名目（将来追加される含みを残してあるが）

茅， 守其（資源調査会副会長）， 瀧崎（工技院調整部長）
佐々木（経審計長官部長）， 坂子（地産調査所長），
鈴木（STAC調査課長）， 小椋， 斎藤， 中泉， 村地，
佐々木（林）， 三宅， 松山， 五十嵐（厚生省公衆衛生局予防研
究課長）， 藤岡， 伏見， 朝永， 山田（工技院電気試験所
電力部長） 千岩

である。



原子戦争の準備に反対する訴え

（ウイーン・アピール）

今日、いくつかの政府が原子戦争をはじめる準備をしている。
かれらは、諸国民にこれをやむをえないものだと思いこませよう
としている。

原子兵器の使用は、みな殺し戦争をよびおこすであろう。

私たちは警告する、原子戦争をはじめる政府は、その国民の犠牲
を失い、すべての国民の糾弾をうけるであろう。

私たちは、ためらうことなく、原子戦争を準備する者に反対する。

私たちは、すべての口で原子兵器の新蔵が放棄され、その製造が
即時停止されることを要求する。

1955・1・19

世界平和評議会 執行局会評（ウイーン）

国連主催原子力平和利用国際会議

口連のハマショルド事務総長から、外務省あてに2月1日付で次のような書類が送られて来た。これには今年の8月ジュネーブで向かれる口連主催原子力平和利用国際会議の招請状、昨年12月4日の口連總會決議、会議の内容と議題、会議運営の規約等が含まれている。まず招請状の全文をここに紹介し、内容については要約を紹介する。(詳細は次号の雑誌「原子力」にのせる予定である)

口連

ニューヨーク

ファイルナンバー: SCA 371/3/03

1955年2月1日

邦省

私は1954年12月4日の口連總會決議810 (IX)に基づき、貴国政府を原子力平和利用に関する国際会議に招請できることを痛しく思います。その決議は、写しを一通同封しましたが、そのBにおいて“口連或いは口連の専任機関 (Specialized agencies) に属するすべての国”が、この会議に招かるべきであると述べております。

総会決議によってつくられたこの会議に関する諮問委員会は、いま口連本部においてその第1回会合を終り、その報告に基づき、会議の組織・手続について次の措置がとられました。

会議は1955年8月8日ジュネーブに招集され、会期は正味12日間で8月20日に終了する。

会議の主要議事日程が作成された。これは附録Iにある。

手続上の規則が定められた。これは附録IIにある。

会議の議事と規則とが上述の總會決議に基づいて作成された。

口連事務総長は、諮問委員会の見解に基づいて、インドのHonu Bhabha

博士はこの会議の評長に任命することを諮問委員会に伝えた。

6人の副評長は、次の諸国による指名に基づき口連事務総長が任命する。ブラジル、カナダ、フランス、ソビエト同盟、大英帝国、アメリカ合衆国。

6人の名前はなるべく早く発表される。

各部会の座長と連絡員が任命され、これもやがて発表される。

マサチューセッツ工科大学 (MIT) の Walter G. Whitman 教授が口連事務総長によって口連事務局の一員に依頼され、Whitman 教授

はこの会評の会評事務総長 (Conference Secretary - General) を担当するよう指名された。またその代理は近く発表される。

口連事務総長は口連内部に、この会評に関する問題で事務総長を補佐する一つの実行部門を任命した。その部門は、Ralph J. Bunch, Gunnar Randers, Ilya S. Tchernychev の3氏よりなる。

…… 私は、会評の手続上の規則のうちでも、とくに次のような意味の條項について注意を喚起しておきたいと存じます。

各口は“5名以内の代表を会評に送る……。代表者は、この会評のために必要な数の顧問 (advisors) を随伴して、技術的論文の発表と討論を効果的に行えるようにすることができる。” (規則 2)

各招請口は、向会よりおそくとも14日以前に、代表者と出席を希望する顧問のリストを提出しなければならない。(規則 4)

会評の準備期間が限られているので、発表したいすべての論文の題目と500語のアブストラクトを、出来れば5月15日より前に、口連事務総長へ提出すること。論文の全文は口連事務総長に7日1日以前に提出すること。(規則 B, 附録)

招請者の旅費その他の費用については、口連はこれを出さない (規則 24)

各招請口の代表に關しては、口連總會決議の3条3節と会評の手続上の規則2に、代表者の中に出来れば“原子力の分野に造詣のある専門家”を含めること、とあることを注意してほしいと思います。

時間が切迫していますので、貴口の政府がこの評事日程に關係するような提出希望論文の性質と数とをなるべく早く口連事務総長に知らせるよう便宜をはかられたいと思います。

このことに關連して、附録Ⅲにあるような通告がソウエト政府からきていることにき及しておきます。

この招請状に対して、この会評への参加に關する貴口政府の意向を早く知らせてほしいと思います。

敬 具

口連事務総長 Dag Hammarskjöld

会評の内容

1. 總 会

- A. 新しい動力源の必要性 I 概 論
- B. “ ” II 各 口
- C. 原子力の役割.

- D. 原子力産業の建設
- E. 原子力の運搬管理および安全に関する考察,
- F. 同位元素の生産と利用,
- G. 大量の放射線物質に関する問題

2. 原子炉部会

- P. 実験用原子炉
- R. 技術

3. Q. 原子炉物理学部会

4. S. 原子炉化学および冶金学会

5. M. 生物学および医学部会

6. I. 放射性同位元素の応用部会

7. H. 最終総会

アジア諸国会談、富永五郎君を送ろう!

すでに新聞で(小さく)報道されているように、この4月6日から10日まで、インドのデリーで アジア諸国会談が開かれる。この会談の目的は、今日の国際緊張のわく内におけるアジアに關係した共同の問題について、意見の交換の機会を与えるにある。

ところでこの会談の内容に原子力問題も取上げられることとなり、インドの科学者連盟から日本の原子科学者の出席をよくに要望して来ました。そこで日本準備委員会から原子力談話会に(非公式ながら)協力する意をたずねて来ました。

すでに期日も切迫していたので、2月16日の分析会に集ったメンバーがまず下相談をし、19日緊急常任委を開くことにし、同時に、各地連絡係(東北、京都、大阪、但し名古屋は松尾君がたまたま上京中)に連絡しました。

19日の常任委(富永、長塚、殿部、大塚、松尾)では、この諸国会談に原子科学者が出席する最大の要諦は

- (1) 学術会談の原則をなくアジアの人たちに理解してもらうよう努めること。
- (2) 今後の相互連絡の道をつけるよう努めること。

にあると結論しました。そこで、常任委は次の行動をとることに決定しました。

- (1) 武谷三男教授がこんどの会談に出席されることが極めて望ましいと考

えるので、教授の事情がよくて、ご自身決定されるならば、それを支援する運動をおこし、とくに核物理研究者の組織によびかける。

(2) 若い連中から1人ぜひ出したいので、常任委の判断および個人の意志から、東大生産研の島永五郎君にいつてもらう。さらに、原子力談話会だけでなく、日本文化人会談、国際技術協力協会などできるだけ広い層の支持の上になつて出席するようにする。これは、会談の性格からいつて望ましいことである。ここで特に注意しなければならないのは、現在の力談の組織では全会員の決断として彼を正式代表とすることは無理であるので、あくまで形式的には彼個人で出席し、実質的に力談のため働いてもらう。

ところで、武谷教授には、立花、島永、服部、大塚の諸君が来てぜひ行つて下さるようお願いしましたが、諸種の事情で承諾されず、今のところ、あきらめざるをえないと判断せざるをえない状態です。

島永君の方は、新聞にも報道されたように、2月22日の会談で代表団の1員に決定しました。

島永君はすでに滬印準備工作にがしげつていますが、今の予定では、休暇をとつて、私用旅券を申請してゆく考えです。

生産研の小川君外1名と、力談の森、服部、大塚などで準備事務局を作つて、資金調達、会談のためのレポート作成などをやりはじめます。

問題は旅費と滞在費ですが、これは原則として出席者の個人負担の形になつており、約40万円を必要とする見通しです。このため、相当広く金を集める必要があります。島永君個人も真空技術関係などで新附をねがう者をもつていますが、この原子力談話会もできる限りの積極的支援をしないとすこしも参加できません。

地方でも、この趣旨を広く理解してもらつて広くカンパを集めてほしい。大きな新附だけをあてにしたのではだめだと考えています。

これに対し、すやく京都と東北からは討論結果の報告がありました（大阪は討議がおくれている由）。その結論は、中央の常任委の出したものと大筋が全く一致しています。とくに東北の指摘した“清き資金”のことは充分キチにめいじてやるべきだと思います。（大塚 記）

京都の結論（西田 記）

1. 参加することには賛成。（三原則実現のための国際的協力が必要とされる

(3)

ことが望ましい。

2. 代表には京都支部としては 島永五郎氏を推せんするが、最終的決定は全委員の意見をざいた上やら収げならない。
3. 準備委員会は力談会が参加して、運動に快力しよう。
4. 費用については準備委員会全体としての財政活動があると思うが、談話会としても、委員が快力して寄稿で得られる寄附、カンパ集め（精進湖のときもあれだけ集ったのだから可能性は大きい）に努力すればなんとかなるだろう。

（以上）

東北の結論 - (伊藤 記) -

2月19日に速報を受け取りました。丁度我々 Group の seminary に当っている日でしたので、この契につき話合いました。いろいろ論議が出ましたが、結論とすでりかなくとも、仙台の委員の夫々の考之方を簡単に報告いたします。

このような口際的な会談に力談会から参加するということは、日本の原子力問題をより広い口際的な問題の一つとして取り扱われる契について大きな意義があると考之られます。同時にそれは海外の考之方の直接の導入ともなるでしょう。この契が十分に参加を援助しなければならぬと思ひます。

又、その一方、力談は全口的な有机的統一が完成されていない。その契も多少分代表を中央から出すとしても、組織の上に立つての行動に全委員がどれだけの理解を持ちうるか疑問であるという意見も出ました。つまり 参加の意義は認められるが、力談の代表としては時期が早すぎるのではないかというのです。

全体としての要員は此の様な善悪の会談の開かれる機会にそれに参加することは力談の成長ともなるだろうという考之方と、上に述べた様に日本の原子力問題を狭い日本だけに閉じこめておかない為に大いに援助したいという傾向がありました。

ただし、問題は旅費のことになります。少々無理な金でもと云つて素情の悪いヒモツキの資金で出かけるならば考之ものです。旅費が工面出来るかどうかはこちらでは分りませんので“清き資金”が集まれば大いに参加すべきでしょう。

本日、緊急滞任季の結果をみました。われわれの考之方と相違ありませんので島永氏を送る意見を強く支持します。よろしくお取りはがらい下さい。

(2月24日)

京都

(2月10日 拜)

最近の出来事をお知らせします。

イ、「原子炉設計の基研研究費」の使用についてはニュース7月号に山口氏の意見が載つていりましたが、そのニュースが我々の手に入る頃には既に話はかなり具体的な形を取つて来ており、研究班参加者のみで行く計算委員の趣向すらも決定していた様です。そういう時に 研究班に参加している三菱電機の計算委員として仕事を求める人を求めて三菱電機へ行っている人が、木村研究室（原子核実験）へ来た時に問題は京都でも急速に具体的となつて来ました。幸い問題は公表され木村研でも研究会全体で討論され、更に“力説”としてお放置すべきでないとの立場からその問題について語り合いました。結局私も“太千依い”しないことになりましたが、その問題で語り合った時の方向について考へて見ますと、オー、 “力説”の委員が研究班に参加する事に対して如何なる態度で取扱うべきかという事。

オ、 “世の人々より我々のグループから” という考へ方其問題となり、又 “核” 屋が “カ” の仕事をしようとする時には必然的に 専内的 “カ” 屋に与らざるを得ないであろうから、その時には核むら足を荒う覚悟が必要であろうということも話されました。それにしても 当然のこと乍ら問題が個人的なものとしてでなく、研究会全体の、或いはグループのものとして公表され、討論される事が如何に大切であるかを反省させられました。

(太組健児)

ロ、 2月上旬に京都へやつて来た立花昭君（鹿野南翁）を囲んで 会談有志が話し合いをやりました。話題にのぼつたことは、(i) アメリカの新原子力法と日本の原子力研究、(ii) 研究班の問題 (iii) アメリカの原子炉学校留学生の問題 (iv) 伏見教授がイギリスに行けなかつたこと。etc です。

アメリカの新原子力法は、将来日本とアメリカの間に結ばれる可能性の強いと考へられる政務決定及びその受入態勢としての立法措置の問題と強い関係をもつたものなので、法學関係の人々との交流によつて、これらの問題に対処する準備態勢を作つておく必要があることに意見の一致をみました。

原子炉学校留学生の問題については学術会談の原子力問題委などで取り扱へるようしなければいけないというような意見でした。

伏見教授がイギリスに行けなかつたことについて、旅券申請を取げるような態度は疑問だとの声が強くていました。

(西田 稔)

ハ、2月15日 京大の基礎物理研究所で 原子核科学研究所研究会 学術講演会として Goodman の原子炉の理論という話がありました。原子核科学研究所協会というのは、木村教授がサイクロの金を集めるために作った会です。

工学部からも 西助教授をはじめ学生にいたるまでかなりの人数が聞きに来ました。木村さんの紹介では話はかなり専門的だということでしたが内容は聴するに4因子公式の説明で、Graphite の均質炉はできないが heterogeneous ならできるといふこと、 P^{239} などを使う小さい炉の均質を取扱うための multigroup method のざつとした説明、および Japan's situation .

Japan's situation は冒頭、私は政府の役人でも何でもなく、個人として意見をのべるだけだと断つてから、U の埋蔵は日本にはないが natural U なら外口から輸入できる (輸出で外貨をかせげ、アメリカもUを輸入している)、Graphite は、アルミ4 tonを作るのに1 ton の Graphite 電極を要するから日本は充分の量をもっている。ただし reactor 用には特に純粋でなければならぬ。日本の A.E.C. とつてもう一つの可能性は重水炉である。夜間電力の余っているときに作ればよい。しかし、日本の原子力は日本人自らの判断で決めることである……。と非常に慎重でした。これは東京でのカ談合員 葛氏の話筋におうところだろうと思います。

しかし最後に、

ここ2〜3年に日本には興味ある変化が生じるだろう。その一つの理由は海外技術員が帰ってくることである。いま原子力にとりかかるといふのはまことに timely である。材料、知恵について Cooperation を得るのが容易になつて来たら、私が今日ここでお話ししているのもその evidence である。

原子力はいつ原子爆に転用されるかも知れない。日本の人がこのことについて深い関心をもつのは当然であり、またその権利がある。しかしわれわれ科学者は、原子力にはいい面があるのだということを説いてまわる義務があると述べ、基本的には Goodman が日本へ来ていることの客観的意味は変らぬことを示しています。

(広重 徹)

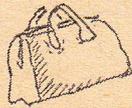
伏見氏ら帰国

原子力調査団中アメリカをまわらなかつた伏見、山崎両氏は25日午前2時羽田に帰ってきた。ヨーロッパをまわり終った調査団の見解として次のような9ヶ条が談話として発表された。

1. どの口でも原子力を20～30年右のエネルギー源として積極的に研究を始めている。
2. 最初につくる原子炉には各口とも4キロワットから一万キロワットの規模のものを考えており、相等進んだ段階から研究を始めようとしている。
3. どの口でも原子力研究には工業界、産業界が積極的に一致して行動している。
4. 各口の原子力委員会はみな超党派的で、その時々の方針のみに左右されぬように作られている。
5. 既設の研究所だけに限らず各口とも原子力中央研究所といったものを作っている。
6. 研究は長期にわたるので予算は年度別ではなく、数年間の継続予算をとっている。
7. 研究面での口際力が強く進んでいる。
8. 放射線の人体へ及ぼす危険については、実験的原子炉の範囲では注意深くやれば問題ない。
9. 原子力に関する法律はフランス、インドをのぞけば特別に作っておらず原子力を特別扱いにしていない。

この談話は誤解を生み易い点、利用され易い点などを含んでいると思われる。伏見氏は談話会の賛助会員でもあるから、一様皆で日本の情勢や口際借勢についてゆつくり話し合う機会をつくりたいと考えている。

尚ヨーロッパからアメリカにまわつた藤岡氏ら調査団の一行は、新聞報道によれば、カナダでは、重水とウランニウムを交換したいと語つて、アメリカに渡つてから取消したり、アメリカと双務協定を結ぶことを希望すると語つたり、口連を訪れてジュネーブの口際会議に日本が発表すべき内容を発表したり、かなり無責任とも思われる行動をとっているようであり、注意する必要があるが、まだ責任ある報道は入手していない。(服部記)



伏見さんの手紙

—小塚さん宛—

(1955, 2, 2の追印)

小塚宏壽様

何もかも取りはなして出かけてしましまして、白紙未を押しつけた形、甚だ申しわけありません。早速原子が学校の人逆でおこまりになつたことと存じます。もつとも前からこの問題の起ることと存じます。もつとも前からこの問題の起ることは申し上げておいた積りですが、どう対処するに付長い見通しを立てなければ方針のたぐないことと存じます。どうも現象面に迫りまわれないようにお願ひします。次に起る問題はこの名前にジュネーブで開催される「原子が平和利用の国際会議」 International Conference on the Peaceful Uses of Atomic Energy に誰をおすかという問題です。ちやうど今日、Kjeller の G. Randers から各口宛に発送したお請状の写しを見せしてもらいましたので、その梗概をお知らせしてご参考に供します。—— 私としてはこのノルウェーが終着駅として、ご承知と存じますが、イギリスには行かずに引き返すことになりました。その事情は帰口の上申し上げられる範囲で申し上げます。その代償として、いささが自由な立場を得ましたので、デンマークに理論物理学のメッカであるボアの研究所をはずねた上バリーに一時泊りかゝり、WFSWの事情を探つておようと思つています。屈永氏からの通信で、この団体が上記の国際会議に対抗する会衆をもちつとつということがわかりましたので、その意図を調べたいと思ひます。その後インドによつて、日本に帰るのは20日頃、綾辻様には由に合います。

(注) 以下に 国際原子力平和利用会議 についてのハマーニヨルドの手紙 (本ニュース 5頁参照) の要約がのつていますが 重複するので省略する一係—)

ヨーロッパ大陸の諸口を地であるいは印象の中で、一番大きいのは、どの口にも大きな原子企業があつて、それと口との合体で原子力が推進されていることです。イタリーのモンテカチニ、スイスのブラウン・ボベリ、ベルギーのユニオン・ミニエール、オランダのフィリナス、スイスのASEA、ノルウェーのノルスク・ヒドロ、フランスとドイツとは大口だけあつて、会社の数はずつと多く、どれが中心かが見わけがつかません。

GRAND HOTEL, Oslo 伏見宏治

観覧者の信 — 大塚君あて —

10日の晩、ATSの会合に出席して、日本の原子力問題について英語で話をする機会を得ました。アママルの娘さんガソク座と伝説してくれましたが、その面白いこと、正確なこと。しかし出席者の歯の討論は全くちんぷんがらふ、湯浅村史の時々耳うちで、議論は日本に似ていると感じました。違っている点は、耳垢が多くて、若い人が少ないこと、明日日本湾に向います。

14 II 1955

K. Husimi.

新会員

新しく沢の方が入会を申し込まれ、常任委員会で承認しました。

氏名	前歴	専攻	紹介者
井阪 秀夫	慶大工(学生)	機械工学	神保

ちとせとら etc

※... 今回の総選挙(2・27)で 元文部政務次官 福井勇氏は愛知県から出馬したが 見事 落選のうきめを見た。彼は昨年原子力調査団に強引にもぐりこんだ自由党代議士であることは、周知の通りである。

※... 先日、ヨーロッパ・インドを絡めぐって帰つて来た成見さんの観光カメラの成績は、いわば“彫像の台を背景にした記念写真”の連続で、寧ろ、寧ろされた人だけが楽しむものといつたところ。調査団の、イナカ紳士ぶりばしのげれた。



雑誌「原子力」について

みすずの雑誌「原子力」は3号まで出て近く4号が出ますが、売行きはもうすこししないと未だよくわかりません。前回のニュースでもおしらせしましたが、日刊工業新聞社からは「原子力工業」という雑誌が出ますし、八雲書房から「アトム科学」という雑誌が発行されます。どちらも毎月20日頃発行される予定だそうです。「原子力工業」の方はおエラ方の名前がずらりと並んでいます。「アトム科学」の方は木村樫一郎氏、山崎文明氏、武田栄一氏らが中心になって、高校生程度の一般向雑誌となるようです。「原子力工業」の編集者は、「みすず」の雑誌のような政治的(?)なものには絶対に致しません。専ら技術のことだけに限りますから」と言って原稿をとって歩いているそうです。「アトム科学」の編集者には会いましたが、この人は学術会誌の原則などということは何も知らないようでした。「原子力」としては、「売らんかば主義のこれらの雑誌と同じ意味で対抗しよう等」ということは考えておりません。規定方針通り、学術会誌の原則の基本的な考え方を、一人でも多くの口々に知って貰うための、特に正確な資料を中心にした雑誌という性格を変える必要はないと思います。そして、この内容を充実させて行くためには、現在の状見、小椋、浜田3氏の編集で、事実上談話会の者が手伝っているという形を、段々と名実共に談話会の編集する雑誌ということにして行くべきだと思います。そのためには、会員の方に今までよりもっと実質的な協力をしていただくような体制を作ってゆく必要があると思います。さしあたって、各会員が固定読者を増加させる運動を積極的に行っていただきたいと思います。定期講究はみすずに直接申し込んで下さい。談話会会員であることを明記すれば2割引になります。尚バックナンバー(54年1,2月, 55年1,2月号)は談話会事務局にも揃えてあります。(服部記)

